

英文法の基礎力低下と英語嫌いの原因を探る： 新入生アンケートと英語診断テストから分析される要因

田村 聡子 ※

Looking into Factors Contributing to the Diminishing Basic English Grammar Competency of Students and Their Disinterest in the Subject

Akiko TAMURA

Abstract — We cannot help but feel strong concern about the diminishing fundamental English competency of our new students every year. It has been said that students' disfavor of English could be attributed to their poor performances in the subject. It seems that we should urgently look into the causes of this symptom of our students so that we can take appropriate measures against the subsequent lowering basic knowledge of their English grammar. In this paper I would like to research why the newcomers to the Kushiro College of Technology have developed a distaste for English and ended in such insufficient knowledge of English basics after their three-year middle school education, based on the results of an achievement test and a survey on their attitudes toward the subject that I conducted with the new entrants of 2009. And in the end I would also like to put forth a proposal on what we could do from now so as to improve the current state of the students' grammar comprehension.

KEYWORDS: diminishing English grammar competency, disinterest in English

1. はじめに

学生の英語の基礎力低下は全国的に見られる現象であるが、年々下がる釧路高専生の英語力の低下には大きな危惧の念を抱かざるを得ない。これまで英語ができないのは英語が嫌いだからという議論はいくつも遭遇してきたが、では何故文法が嫌いなのか、また英文法の何がわからないのかまで深く追求したものはあまりないように思われる。本稿ではわたくしが2009年度新入生に対して実施した中学で学んだはずの基礎英文法の診断テストと、英語に対する意識調査アンケートの結果から得られたデータを基に「なぜ英文法が嫌いなのか」「なぜ英語の基礎力が低下しているのか」を考察したい。

英語の診断テストは共通テストとは別に実施したもので、内容は中学英語の文法範囲、レベルは必要不可欠な基本的知識を問うものである。共通テストは英検3級問題を採用しマークシート方

式で行われるが、診断テストは筆記型で実施した。マークシート方式の多項選択制にすると‘偶然’あるいは‘感’によって正解を得てしまう可能性があり学生の真の知識力を測れるとは言いがたいからである。

この中学復習診断テストの結果は想定していたものよりもはるかに低く、このことから学生たちの英語に対する意識調査を実施することにした。この調査に対する回答は想像通りで、9割の学生が英語に対して苦手意識を持っていることがわかった。また、なぜ英語が苦手あるいは分からないのかという質問も書く方式で答えてもらった。

診断テストの問題の解答の中には吃驚するようなものが数多く見られ、また意識調査の回答からは学生たちに共通して見られる英語学習の仕方の問題点が明らかになった。これらのテストと調査の結果から「なぜ英語が嫌いなのか」「なぜ英語の基礎学力が低下しているのか」の原因を探

※ 釧路高専 一般教科

り、最後に釧路高専における今後の英語教育のあり方について提案したいと考える。

2. 基礎学力の低下の実態

2-1. 共通テストの結果から

学生の英語の基礎学力が低下していることや基礎知識が欠落していることは、わたくしが着任した5年前から感じていることであるが、このことは毎年新入生に対して行われる共通テストの結果に如実に現れている。その実例として平成16年から20年の5年間の共通テストで80点以上を獲得した学生数の推移を提示したい。

表1 共通テストにおける80点獲得者数の推移

平成16年	57 /206名
平成17年	55 /202名
平成18年	39 /205名
平成19年	36 /204名
平成20年	25 /211名

英語の共通テストは英検3級問題であることは先にも述べたが、これは英検3級が中学3年間で到達できる内容レベルであるからである。平成16年では少なくとも全学生の約3分の1が中学で習得すべき英語の知識をきちんと身につけていたが、5年後の平成20年にはその数も平成16年度の約6割減となり、全学生の約1割しか英語の礎となる基礎文法を学びきれていないという現実が明白になった。このように、学生の英語の基礎学力が毎年低下しているの是一目瞭然である。

2-2. 診断テストの結果から

筆記型で実施した診断テストの結果は更に学生たちの低迷する英語力の実態を明らかにすることになった。次の表は今年度の学生たちが獲得した点数の分布を示したものである。

表2 診断テストの点数分布

50点未満	117 /206名
50～60点未満	42名
60～70点未満	22名
70～80点未満	18名
80～90点未満	6名
90点～	2名

大変残念なことにこの中学基礎レベルの問題を半分も正しく解けない学生が全体の57%も占めてしまった。テスト問題はあくまでも基礎レベルであり決して難易度が高いわけではない。ただし、筆記型であるが故に選択問題や定型的な問題にしか慣れていない学生たちにとっては書き換え問題や日本語訳の問題は解きにくかったことは事実である。ここにも中学時代の学習方法のまづさを垣間見ることができる。この表では明示していないが獲得点数が一桁台の学生が5名もいた。逆に90点以上の高得点を獲得した学生はたったの2名であった。

2-3. 吃驚と懸念を招く解答例

前項で書き換え問題ができていないと述べたが、その書き換え問題も決して難易度の高いものではなく全く初歩的な問題である。その一例として次に否定文に書き換える問題を提示する。

次の文を否定文に書き換えなさい。

- 1) There were many birds there.
- 2) I went to the movies with Kate.
- 3) He will study abroad this year.
- 4) Beth sings her school songs well.

1)はnotをThereの後ろに挿入するだけなので正答率はほぼ100%であった。3)も同様にnotをwillの後ろに挿入するだけなので正答率は90%を超えた。しかしながら、その3)の問題においてでさえ目を見張るような解答がいくつかあった。2)と4)に対する解答の中には驚愕せざるを得ないものが多く見られた。次にそれらの一部を例示する。

- 2) I **wen't** to the movies with Kate.
I went to the **doesn't** movie with Kate.
- 3) He **willn't** study abroad this year.
He **don't going to** study abroad this year.
- 4) Beth sings her school songs **not** well.
Beth sings her school **does not** songs well.
Beth sings **aren't** her school songs well.

2)のwen'tは動詞のwentにnotをつけて短縮形にしたものであろう。また、3)のwilln'tはwillにnotをつけるとwon'tという形に変化して短縮形になることを覚えていないことを示している。他の解答例のどれも人称や時制に合わせて否定文を

正しく作れないという事実を明らかにしている。肯定文を疑問・否定文にするという学習は英文法の初期的基礎学習である。この英語の本質的英文法の知識が欠落していることは忌々しき問題である。

3. 英語に対する意識調査の結果から

3-1. なぜ英語が苦手(分からない)のか

診断テストの惨憺たる結果を目の当たりにして一体どの程度の学生が英語を苦手、つまり分からないと感じているのかを調査することにした。今年の新入生全員に対し、英語が苦手(分からない)か得意か、そして苦手な場合は何故苦手なのか、得意な場合はどのようにして英語を勉強したのかを質問してみた。得られた回答は、9割の学生が英語を苦手とし、残り1割が得意としていることが判った。英語が分からない理由として以下のような回答が多く挙げられていた。

- ◆ 単語や文法が多くて覚えられない。
- ◆ 単語の意味が分からない。
- ◆ 単語が書けない。
- ◆ (英語の)語順が分からない。
- ◆ (日本語)訳ができない。
- ◆ 同じ文法(項目)内に種類(用法)がたくさんあって覚えられない。
- ◆ ひとつの文法を深く理解しないまま次の文法に入ってしまうから。
- ◆ (英語の)勉強の仕方が分からない。
- ◆ (英語を)理解しようとする気持ちがなかった。
- ◆ 自主学習・復習を怠った。
- ◆ 数学と違って自動的に頭に入らない。

これらの回答から判明したことは、英語を苦手とする学生たちは共通して英単語や文法を覚えられないということである。学生たちは英単語や文法項目が多すぎると感じているようであるが中学の学習指導要領によれば中学3年間の新語数は900語だけである。この点については次章で取り上げることにする。「勉強の仕方が分からない」「理解しようとする気持ちがなかった」などの理由は学生の正直な回答であるが、これは英語という教科にどのように取り組めばよいのか分からないことを示している。

次に英語を得意とする学生たちの英語の勉強

の仕方を列挙したい。

- ◆ 単語を書いて覚えた。例文も書いて覚えた。
- ◆ 単語・熟語をノートに書いて覚えた。
- ◆ 単語練習。文法を書いて覚え、それをもとに例題を解いて問題集を解いた。
- ◆ 教科書の本文と訳をノートに書き写した。

英語が得意と答えた学生の回答を見てわかったことは、彼らは共通して英単語も文法も、とにかく何度も繰り返し書いて覚えた、つまり反復練習をしていたということである。これは彼らが自分なりの英語の勉強の仕方を確立していたことを示している。そしてこの時間をかけ‘書いて反復練習する’という作業が英語を苦手とする学生と得意とする学生の確たる違いを生み出しているといってもいいであろう。

3-2. 英語嫌いと英語の基礎学力低下の原因

釧路高専に入学してきた学生の半数以上が中学で獲得すべきスタンダード英語の習得に至っていないことが英語診断テストで明らかになったが、では何故これほど多くの学生が英語学習につまずき、英語嫌いに陥ってしまったのだろうか。これを探るために中学校の学習指導要領を調べることにした。中学校の学習内容は指導要領に基づいているからである。以下に英語の学習指導要領の変遷を表にして記してみた。

表3 英語の学習指導要領の変遷

指導要領 改訂年	新語表	必修語	文法事項
1969年	1100語	610語	21項目
1977年	1050語	490語	13項目
1989年	1000語	507語	11項目
1999年	900語	100語	*11項目

文部省「中学学習指導要領」により作成

上の表が示しているように指導要領が改訂されるたびに学習内容の削減が繰り返されてきた。すなわち、英語の本質的内容が削減され続けられてきたことになる。過去最近の89年と99年の改訂を比較しただけでも必修語は5分の1の100語に削減された。99年の必修語はどのようなものであるかといえば、季節、月の名前や曜日以外のほとんどの名詞が共通して学ぶべき語から姿を消し

さられた。名詞は生徒の力や置かれた環境に応じて選ばれよという文科省の主張から基本単語のリストに名詞がほとんど含まれなくなった。新入学生の語彙力が低いのもうなずける。また、99年の改訂では「ゆとり教育」が導入され、英語の授業は週3時間、学習内容も3割削減された。表の上では文法項目数に変化は見られないが、99年の改訂により「会話重視型」の内容に変更され*「文法は理解の段階にとどめる」という制限を設けられてしまった。学習内容の3割減と「会話重視」の授業内容に加え、週3時間の授業時数への低減により授業の進度が早まり、ひとつの文法項目を丁寧に教える時間がなくなってしまい中学生が文法を租借・理解・定着させる暇もなく次の項目に移行していくという現実があったのである。前項3-1.で紹介した意識調査に書かれた「ひとつの文法を深く理解しないまま次の文法に入ってしまうから」という学生のコメントがこのような中学での英語教育事情を反映しているといえるだろう。

指導要領の改訂とは直接関係はないが、93年には文部省は文部次官通知で各都道府県委員会に業者テストの追放を求めたため学校内で標準学力テストが行われなくなった。これにより中学校の生徒間には定期試験だけ乗り切ればよいという風潮が広まり、教科書準拠のガイドブックだけしか勉強しない、単語は教科書の巻末に掲載されている意味だけ見て辞書は引かないなどのマイナスの傾向を生み出してしまったといえるかもしれない。

3-3. 減少する校内・外の学習時間

あるデータ¹⁾によれば日本の中学生の平均家庭学習時間は1時間48分である。わたくしが実施した学習時間に関するアンケート調査によれば釧路高専の新入生の平均校外学習時間は1時間14分で全国平均より34分短い。アンケート結果の詳細は、「(家庭・寮では)全く勉強しない」と回答した学生が45名で全体の22%、30分くらいが13名で6%、合わせると28%で全学生の約3割がテスト前以外は校外学習をしないと回答している。1~2時間勉強すると回答した学生が最も多く73名で全体の36%を占めているが、その勉強時間の使い方にある特定の特徴が見られた。2時間の勉強時間のうち1時間以上を数学に費やし、あとは英語に20~30分、物理に10分、化学10分くらいという細切れ的な勉強をしている学生が多い

ことが判った。また、「その日の気分で勉強する」「やりたいやつをやる」というコメントが少なからずあり、計画性のない勉強をしていることが明らかになった。英語に対する意識調査の「何故英語が分からないのか」という質問に対し「単語や文法が覚えられないから」という回答が圧倒的に多かったが、覚えられないのは学習時間が短い上に、計画性のない気分次第の勉強をしているせいで、授業で学習した内容を頭に定着させないうちに途中で勉強をやめているのが原因であるといえるだろう。ちなみに、家庭(寮)で勉強以外の時間をどのように過ごしているかという質問に対しては「テレビを観る」、「コンピューターゲームをする」という回答に加え、「寝る」という回答も少なからずあった。

4. 基礎学力低下の誘因 - 負の連鎖構造

4-1. 基礎学力低下の3大要因

これまで見てきた新入生の英語力低下の背景から考察されることは大体3点にまとめられる。

- ① 語彙力・文法力の著しい低下
- ② 学習時間の低下 - 家庭学習の時間はたっぷりあるにもかかわらずその時間を他のことをする時間、例えばテレビ、コンピューターゲームなどに費やしていた。意識調査の回答の中に見られた「自主学習・復習を怠ったから」という学生のコメントがこのことを証明している。
- ③ 知識欲・学習意欲の低下 - 意識調査の中に「(英語を)理解しようとする気持ちがなかった」という回答があったが、これは学生たちの「とっつきにくいもの」から関心を逸らしてしまう傾向を表しているといえるであろう。前項3-2.で目先の定期試験だけを乗り切ればよいという風潮が出来上がってしまっているということを指摘したが、このことが知識欲や学習意欲の低下につながっているのではないかと考えられる。また、「(英語の)勉強の仕方が分からない」という回答もあったが、このコメントも中学校の教科書準拠のガイドブックや塾のワークブックなど与えられたものだけをやってきて自分なりの勉強の仕方を確立するに至らなかったことを証明していると考察される。

4-2. 負の連鎖構造

これまでの流れをまとめてみると、99年の指導要領の改訂(2002年実施)で「ゆとり教育」が導入

され英語の授業時数が週3時間に低減、学習内容も3割削減されたのに加え「会話重視型」の内容への転換のために学ぶべき英語の基礎知識が減った上に、校内・外の学習時間が短い。それ故、

学習内容が定着しない → 基礎基本の知識の欠如 → 分からない → 嫌い → 勉強しない → 更に分からない → もっと嫌い

という負の連鎖構造が出来上がってしまい基礎学力の低下の原因になっているのではないかと考察される。

5. 今後の課題

学生の英語の基礎学力の低下を嘆いてばかりいても何の解決にも至らない。学力低下の問題は釧路高専だけが直面している課題ではないようである。全国の他の大学機関でもこの問題を重く受けとめリメディアル教育（入学後再補習教育）に取り組んでいる。釧路高専においても火急早急の何らかの補習措置を取らなければならないと考える。その方法として3点のことを提案したい。ひとつ目は「入学前教育の見直しと再構築」である。これまでも新入生に対し自己学習できるように中学基礎英語の復習用の橋渡し教材を配布してきたが大きな効果があったとはいえない。そこで新入生には入学前の余裕のある時間をもっと有効に英語の勉強に費やしてもらえよう工夫する必要がある。ふたつ目に「リメディアル教育的な措置の導入を検討すること」である。大学で行われているような補習授業のカリキュラム化（大学の場合高校の学習内容）は無理であるが可及的に何らかの手立てが必要とされる学生に対しては定期的な補習を実施することを検討した方がよいであろう。また、定期的を実施することで学習習慣を身に付かせることもできる。この学習習慣の定着の観点から考えるとeラーニングも視野に入れてもよいであろう。ただし、ソフトとハードの両面における大がかりな準備が必要になってくるため現段階では現実的ではないかもしれない。最後に学生の英語の基礎文法理解をより効果的に促すために文法項目の配列を再考察するということである。互いに関連のないひとつひとつ別個の文法項目を教科書や他の教材通りに教えるのではなく、互いに関連性のある項目を体系的に再配列してシラバス化すると、

ひとつの文法を完全に理解していなくても次の文法を学ぶ過程でひとつ前に学習した文法内容を理解できるようになる。また、ひとつの文法が終わっても次の文法学習で重なる部分があれば覚えやすい。これはわたくし自身の研究課題でもあるので、釧路高専の学生たちの基礎英語力の底上げを図ることに貢献できるよう今後この研究において研鑽を重ねていきたい。

ⁱ IEA（国際教育到達度評価学会）による99年度「国際数学・理科教育調査」-8学年(中学2年)生を対象に実施。38カ国18万人参加。日本からは4,745名が参加。

参考文献

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄. 「小数ができない大学生」東洋経済新報社（2000）

佐藤 学. 『子供たちはなぜ学びから逃走するのか』「世界」岩波書店（2000）p63-72

浪川 幸彦. 『学力は本当に低下していないのか』「学力低下と新学習指導要領」岩波ブックレット No.538（2001）p55

藤澤伸介. 「ごまかし勉強上・下」新曜社（2002）

「教育データブック 第10版」時事通信社（2004）

「データが語る② 学校の課題」 図書文化社（2007）

診断テストー出典：ANYTIME 数研書院